

郷土史

補論・岡田清直と岡田錠次郎

～蝦夷地勤務時代の錠次郎～

小栗勝也

1、はじめに

用行義塾は、学制によって小学校を設置することが文部省から命じられるよりも前の明治五年六月二五日に久津部村（現・袋井市）に開設された小学校である。当該地域では初の小学校となる。その学校の教員を務めた一人に岡田清直があった。この岡田清直について、岡田錠次郎と同一人物であると記したのが前田匡一郎氏の『駿遠へ移住した徳川家臣団』である。二人が同一人物であるとする文献はこの本が唯一である。

しかし前田氏は二人が同一人物であることの根拠を何も示していないので問題があると、本誌『文芸袋井』第一二号掲載の拙稿で指摘した。その後、前田氏の判断が正しいか否かを検証するために、小栗は前田氏が参考にした文献や寺などの手掛かりの全てを再調査する作業に着手した。長時間を費やした作業の結果は、別稿で明らかにしたが、同一人物であるとする前田氏の判断には、やはり根拠が見当たらず、別に存在する理由から二人は別人と考えられるというのが、小栗が導き出した新しい仮説である。小栗の推定では岡田錠次郎は文政三年に生まれ、元治元年に数えて四五歳であった。これに対して前田氏は、岡田は明治元年に満三一歳と推定し、生まれた年は天保八年と記している。これら二説に基づいて岡田の年齢推移を示したものが表1である。小栗の説と前田氏の説では満年齢で一七歳の違いが生じることになる。

小栗が判定の根拠としたものは、多聞櫓の履歴明細短冊から判明している岡田錠次郎の情報にある。その内容は『江戸幕臣人名事典』の改訂新版（以下

いるが、ここにもそれを転記しておきたい。但し、ここでは時期が分かる出来ごとのみについて箇条書きで示す。

嘉永六丑年三月二十〇日養父家督被下置小普請二罷成

同年十二月十日御留守居同心被仰付

安政二卯年四月四日箱館奉行支配調役下役被仰付

同八月箱館表江引越

同三辰年三月〇日蝦夷地スツ、詰被申渡

〇二十一日場所表江引越

同六未年四月六日御役名定役与改候旨被仰渡

同七申年十月箱館詰被申渡

同十一月箱館表江引越

元治元子年八月二十三日定役元メ被仰付

（小栗注：□で示されている部分は判読不明であることを意味する。）

『事典』に示されている岡田錠次郎の経歴は、前掲『文芸袋井』第一二号所収の拙稿で既に紹介して

2、江戸末期の岡田錠次郎

しかしながら、右の情報と異なるもの、或は、右にはない情報が別に存在することを小栗は確認して

表1 岡田錠次郎の
年齢の推移

周 期	十二支	西 曆 (目安)	和 曆	小 栗 の 判 定 ↓	前 田 氏 の 判 定 ↓
				元治元年に 45 歳	明治元年に 31 歳
1	子	1816	文 化 13 年		
2	丑	1817	14 年		
3	寅	1818	文 政 元 年		
4	卯	1819	2 年		
5	辰	1820	3 年	数 え 1 歳	
6	巳	1821	4 年	2 歳	
7	午	1822	5 年	3 歳	
8	未	1823	6 年	4 歳	
9	申	1824	7 年	5 歳	
10	酉	1825	8 年	6 歳	
11	戌	1826	9 年	7 歳	
12	亥	1827	10 年	8 歳	
1	子	1828	11 年	9 歳	
2	丑	1829	12 年	10 歳	
3	寅	1830	天 保 元 年	11 歳	
4	卯	1831	2 年	12 歳	
5	辰	1832	3 年	13 歳	
6	巳	1833	4 年	14 歳	
7	午	1834	5 年	15 歳	
8	未	1835	6 年	16 歳	
9	申	1836	7 年	17 歳	
10	酉	1837	8 年	18 歳	満 0 歳
11	戌	1838	9 年	19 歳	1 歳
12	亥	1839	10 年	20 歳	2 歳
1	子	1840	11 年	21 歳	3 歳
2	丑	1841	12 年	22 歳	4 歳
3	寅	1842	13 年	23 歳	5 歳
4	卯	1843	14 年	24 歳	6 歳
5	辰	1844	弘 化 元 年	25 歳	7 歳
6	巳	1845	2 年	26 歳	8 歳
7	午	1846	3 年	27 歳	9 歳
8	未	1847	4 年	28 歳	10 歳
9	申	1848	嘉 永 元 年	29 歳	11 歳
10	酉	1849	2 年	30 歳	12 歳
11	戌	1850	3 年	31 歳	13 歳
12	亥	1851	4 年	32 歳	14 歳
1	子	1852	5 年	33 歳	15 歳
2	丑	1853	6 年	34 歳	16 歳
3	寅	1854	安 政 元 年	35 歳	17 歳
4	卯	1855	2 年	36 歳	18 歳
5	辰	1856	3 年	37 歳	19 歳
6	巳	1857	4 年	38 歳	20 歳
7	午	1858	5 年	39 歳	21 歳
8	未	1859	6 年	40 歳	22 歳
9	申	1860	萬 延 元 年	41 歳	23 歳
10	酉	1861	文 久 元 年	42 歳	24 歳
11	戌	1862	2 年	43 歳	25 歳
12	亥	1863	3 年	44 歳	26 歳
1	子	1864	元 治 元 年	45 歳	27 歳
2	丑	1865	慶 應 元 年	46 歳	28 歳
3	寅	1866	2 年	47 歳	29 歳
4	卯	1867	3 年	48 歳	30 歳
5	辰	1868	明 治 元 年	49 歳	31 歳

いる。次の①～⑤がそれである。

①前田氏が参考にした文献として明記している一つに『旧幕府』がある。旧幕臣たちが自身の記録を残すため、明治三〇年四月刊行の第一号から明治三四年八月刊行の第五巻第七号まで発行された定期刊行物である。現在では、原書房から昭和四七年に発行された復刻版を合本の形で見る事ができる。その合本六に収録されている『旧幕府』第四巻第三号に「安政六年未年五月改 函府人名録」が掲載されている。その中で、箱館奉行の「支配勘定格」の「定役元メ」の下に位置する「定役下役」の三番目に「スツ、岡田錠次郎」の名がある(二頁)。情報はそのただけであって、岡田に関する他の情報はここにはない。「スツ、」は「寿都」(すつつ)のことである。なお、この定役下役は「高三十俵三人フチ／役フチ三人フチ／役金三十五両」(「／」は小栗による。改行を意味する)と記されている(同頁)から、当時の岡田の身分と禄高を知ることができる。『事典』では、岡田錠次郎は安政六年四月には「定役」に変更されたことになっているが、右の

「安政六年未年五月改」の時点での「定役下役」という情報とは、どのように整合性がとれるのであるうか。定役下役に就いた後に、定役になるのが普通だと思われるのに、これでは逆になってしまう。もし逆でないとしたら、考えられることは、それまで「調役下役」であった肩書きうち、「調役」の部分のみ「定役」に置き換わっただけで「下役」の身分はそのままであった、という解釈が、かろうじて可能である。あるいは、史料の記録のどこかに誤りがあった可能性もある。何が正しいのかは不明のままである。ここでは、『事典』とは異なる情報が存在しているという事実だけを紹介しておきたい。なお、前田氏の本では、この情報は無視されている。

②次に紹介するのは前田氏が調べていない文献であるが、杉谷昭「幕末蝦夷地調査史料『入北記』について」(『日本歴史』第二九四号、一九七二年一月)の中に岡田錠次郎の名が記されている。この杉谷論文は、島義勇(島田右衛門)が記した蝦夷地調査記録である『入北記』のうち、現在その内容が確認できる安政四年八月、九月の記録について紹

介するもので、その『入北記』には蝦夷地支配関係の役職者一覧表（安政四年）が収められている（八月に島が勤番詰役所の公簿から写し取ったと思われる記録の一部）。これほどまとまって記された関連史料は他に例がないと、このことで貴重なものであるらしい。その一覧表の中に岡田錠次郎の名がある。関連部分を抜き書きして示すと次のようになる。

スツ、詰

調役並出役

下役

長谷川儀三郎

岡田錠次郎

下役出役

同役

成瀬金左衛門

杉山半太夫

同心

足輕

藤田平太郎

小泉又左衛門

庭山良助

この記録から安政四年八月頃のスツ詰の役人中で岡田錠次郎は長谷川に次ぐナンバー2の地位にあったことが分かる。地方の下級役人ではあるが、

その地では幹部クラスといったところであろうか。ところで、ここに名が記されている長谷川儀三郎について調べたところ、北海道立文書館がWEBの北方資料デジタルライブラリーで公開している史料の中に、明治五年に開拓使に採用されたことを示す一次史料が存在していた。⁵³ しかも、そこには長谷川の所属が「浜松県貫属」と記されていた。すると彼も岡田錠次郎と同じく維新後、北海道から遠州の地に移ってきた幕臣ということになる。

そこで前田氏の『駿遠へ移住した徳川家臣団』を見てみると、第三編四〇六頁に彼の記録があった。しかし、そこでの正式名称は長谷川常永となっており、別名として儀三郎の名が記されている。明治元年の推定満年齢は三三歳とされている。長谷川常永の項目内容には、「父儀三郎（箱館奉行支配調役）」とあるから、彼は儀三郎の息子ということになる。前田氏の本によると、常永自身は慶應二年に家督を受けて「箱館奉行支配手附」として出仕している。家督が常永に移ったとすれば、父の儀三郎はそこで没したか隠居したことになる。また、岡田錠次郎が

安政二年に箱館奉行支配調役下役を命じられた時と比べると、常永の手附としての出仕は七年ほど後のことになる。前田氏による明治元年時点での岡田の推定年齢満三一歳と、長谷川常永の同三二歳は、ほぼ変わらないが、箱館奉行支配の役人として仕えるようになったのは常永の方が遅かったようである。この常永が、前田氏の本によると明治五年に開拓使に仕えているのである。つまり、北方資料デジタルライブラリーで見た儀三郎は息子のことになる。すると、錠次郎の直属の上司であった長谷川儀三郎は、長谷川常永の父ということになる。

以上のことから、前田氏の本の記録がすべて正しいという仮定の下での話にはなるが（但し前田氏は長谷川常永の経歴の根拠を示していない）、長谷川儀三郎は二人いて、錠次郎の上司は父の方であった。従って、息子の二代目儀三郎（常永）の年齢や肩書きは、蝦夷地勤務時代の錠次郎との関係を考える上では役に立たないことになる。但し、次の年齢差の情報は役に立つであろう。すなわち、前述の通り、岡田錠次郎は常永とほぼ同じ年なので、スツで共

に働いていた頃の長谷川儀三郎は、岡田錠次郎から見て父親と同じ位に年が離れていたことになる。

より具体的に示すと、この長谷川儀三郎については前掲『事典』に経歴が示されており（常永は『事典』にはない）、そこには「寅五十七歳」とある。

「寅」は前掲別稿で小栗が証明した通り、履歴明細短冊が作られた年を表している。表1から江戸末期の寅年は安政元年と慶応二年が考えられるが、『事典』には安政二年以降の儀三郎の経歴が示されていることから、安政元年にこの明細が作られることはあり得ない。従って慶応二年（一八六六年）ということになり、この時点で彼は五七歳（数え）であったことになる。すると安政四年（一八五七年）当時は右より九歳程若くなるので数えで四八歳程であったことになる。前田氏の判定では岡田錠次郎は安政四年では満二〇歳となるので、儀三郎とは二七（二八歳ほどの年の差があったことになる。但し、これは、あくまでも前田氏の推定年齢を前提にした話であり、小栗が判定した岡田錠次郎の年齢では、そのようにはならない。この年齢差から考えられるこ

とについては後述する。

以上、②の文献から岡田錠次郎に関して言えることは次の事柄のみである。すなわち、前出の『事典』では、岡田は安政二年に調役下役を命じられたあと、安政三年三月にスツツ詰めを命じられたことが記録されていたが、翌四年も、まだ同じ役職のままスツツにいたことが、この史料から確認できる。

③ところが、安政四年に岡田が小樽詰であると書かれている文献が出てきた。これも前田氏が見ていないものである。すなわち『札幌区史』(二六八頁)によると、安政四年二月二五日、奉行村垣淡路守が石狩に滞在中、「小樽詰岡田錠次郎に余市より後方羊蹄地方を経、虻田に至る平原の踏検を命じたと」いうのである。実際に錠次郎は踏査を行い、新たな道を開発することに繋がったらしい(俱知安の近くまで開かれたが中絶⁶⁾)。

僅かに記されていた情報であるが、もしこの記述が事実であれば、安政四年二月には岡田は小樽詰であったことになる。②の記録では安政四年には、まだスツツ詰であったはずであるが、なぜ同じ年に小

樽詰となつていたのであろうか。『札幌区史』が間違っていないのであれば、岡田の小樽詰の情報は、『事典』にも、また他のどこにも記されていない新情報となる。スツツ詰のまま、一時的に小樽行きを命じられただけと考えることもできるが、『札幌区史』が間違っている可能性もある。小栗は岡田の経歴を詳細に探求したいとは考えていないので、この点の解明作業は他の研究者に譲りたい。

④以下はスツツ詰である点とは他と同じであるが、彼の業務内容が分かる史料である。これも前田氏が見ていないものである。永野正弘「1857-1859年における箱館奉行による種痘の再検討」(北海道大学『北方人文研究』第四号、二〇一一年三月三十一日、一頁)がそれである。これによれば、安政四年一月、箱館奉行の村垣淡路守は、蝦夷地で流行していた疱瘡に対応するため、西蝦夷地スツツ詰の岡田錠次郎に「御救助筋取調」を命じが、これが蝦夷で種痘が実施される契機となった、ということである。現地の流行病の対応に岡田錠次郎が一役買っていたことを示す記録であるが、このようなこ

とは、前田氏の本にも、『事典』にも記されていない。

⑤また、山田志乃布「幕末蝦夷地の絵図にみる地域情報の把握」(東京学芸大学・歴史地理学会『歴史地理学』第四二巻第二号、二〇〇〇年三月)には、安政年間から万延元年までの西蝦夷地における幕府の役人等を独自にまとめたリストが紹介されている。それによれば岡田錠次郎は、「下役」として「スツツ」に、更にまた、「下役」または「定詰」(小栗注:「ママ」は同文献に記されているまま、の意。定役のことか)として、「ヲタスツ」「イソヤ」「イワナイ」の地で勤務していたことが分かる。但し、このリストからは、時期が右の範囲内であることが分かるのみで、それ以上の詳しい時期は分からない。また、ここには岡田の勤務地として小樽の地名は記されていない。「ヲタスツ」はスツツの隣に位置する地名であり、オタルナイ(小樽)とは別であり(山田論文中の図2を参照)、オタスツを小樽と誤解したとは考えられない。前記③の資料では小樽詰とあったが、なぜか、ここには小樽はない。その理

由は分からない。

以上①～⑤の五つが、『事典』でも前田氏の本でも触れられたことのない岡田錠次郎に関する新しい情報である。いつも岡田錠次郎と共に出てくる地名はスツツ(寿都)であるから、彼がそこに居たことは間違いないが、スツツの外に出て働くこともあったようである。また、種痘の対応や原野の踏査、道路の開発等々、分野を限定することなく、命じられるままに折々の任務に対応したことも分かる。働く場所や内容が時期によって様々であるのは、役人としては当たり前のことなので不思議ではない。

3、経歴と年齢の比較から

江戸末期における岡田錠次郎の時系列の役職等について、現在判明している内容は前章で見た通りである。『事典』に示された情報及び、それ以外で小栗が追加した情報(年が不明の⑤は除外)を加え、更に小栗と前田氏が判定した岡田の年齢を合わせて表示すると、表2の年表ができる⁷⁾。

表 2 岡田 錠次郎の経歴と年齢の対比

干支	西暦 (目安)	和暦	経歴	出典	小栗の判 定年齢 (数え年)	前田氏の 判定年齢 (満年齢)
丑	1853	嘉永6年 (丑年)3月	家督を受け小普請に	『事典』	34歳	16歳
〃	〃	同年12月	御留守居同心に	『事典』	〃	〃
卯	1855	安政2年 (卯年)4月	箱館奉行支配調役 下役に	『事典』	36歳	18歳
〃	〃	同年8月	箱館表へ引越	『事典』	〃	〃
辰	1856	安政3年 (辰年)3月	蝦夷地スツ、詰を申 し渡される	『事典』	37歳	19歳
?	?	?【直後か】	場所表へ引越 (場 所表とはスツの表の意味 か)	『事典』	?	?
巳	1857	安政4年1 月	箱館奉行の村垣淡路守 が、蝦夷地で流行してい た痘瘡に対応するためスツ 詰の岡田錠次郎に「御 救助筋取調」を命じる	④	38歳	20歳
〃	〃	同年2月	奉行村垣淡路守が石狩 に滞在中、小樽詰め の岡田錠次郎に対して、余 市から後方、羊蹄山を 経て、虻田に至る平 原を「踏検」するよう命 じる	③	〃	〃
〃	〃	同年(巳年) 8月時点	スツ詰 下役	②	〃	〃
未	1859	安政6年 (未年)4月	役名を定役に改める 旨、仰せ渡される	『事典』	40歳	22歳
〃	〃	同年5月時点	定役下役	①	〃	〃
申	1860	安政7年 (申年)10月 =万延元年	箱館詰を申し渡され る	『事典』	41歳	23歳
〃	〃	同年11月	箱館表へ引越	『事典』	〃	〃
子	1864	元治元年 (子年)8月	定役元へに	『事典』	45歳	27歳

錠次郎は、最後は元締のような中間管理職でもあったので、そのことを考えると小栗が判定した年齢の方が適切であると強く思えてくる。しかし、前田氏の判定結果である一〇代〜二〇代程の年齢であつても蝦夷地勤務が絶対にあり得ないとは言えないので悩ましい所である。

ただ、前記②の所でも述べた通り、岡田錠次郎の直属の上司にあたる長谷川儀三郎の息子常永(儀三郎)の年齢は、前田氏の本の記述が正しいと仮定すると、錠次郎とはほぼ同じであるから、長谷川は二七〜二八歳も年が若い我が子同然の錠次郎を直属の部下として共に仕事をしていたことになる。この年齢差は不自然である。

別の記録によれば、当時の寿都で何かの用が入ると、長谷川儀三郎と岡田錠次郎の二人が一緒に対応することが普通のものであった。例えば、『新札幌市史 第一巻 通史一』⁽⁸⁾によると、箱館奉行・村垣範正が安政三年十一月から翌年二月までスツに逗留していた間に、「長谷川儀三郎や、同じくスツ詰であつた下役の岡田錠次郎らに、イシカリ場所の

様子を聞きただし、イシカリ改革のプランを練ったとみられる」という(五七一〜五七二頁)。

また、松浦武四郎の『後方羊蹄日誌』によれば、安政四年八月九日に松浦が寿都に到着すると直ちに長谷川と岡田の二人を訪ねているが、その目的は、二人が「アイヌを非常に親切に、大切にされる方々なので、先日来アイヌ達から頼まれた件について善処方をお願いする為」であつた。松浦は寿都に着く前に尻別川を「踏査」していたのだが、旧来からこの河口付近で梁を作つて鮭を獲ることは禁止されていたのに禁を破つて鮭を大量に獲る者があるために、鮭が上流に遡上せず、上流で鮭漁を行っていた部落では全く獲れなくなつて困っているから何とかして欲しいという訴えをアイヌから受けていたのであつた。それを長谷川と岡田の「両氏によく事情を説明したところ、早速承諾されて、今後はそういうことがないように取締りを厳しくする事を約束」したといふ⁽⁹⁾。

このように、当時スツ及びその周辺のこと何か用件が生じれば、真っ先に対応していたのはスツ

ツ詰役人の長谷川儀三郎と岡田錠次郎の二人であった。

前田氏の判定が正しければ、この二人の年齢は親子ほどの差があったことになるが、そのような年齢差で右の様に連携して業務に当たることが可能であつたのだろうか。絶対に不可能であつたとは思わなければ、当時においては普通のこととは思えない。

また岡田は、箱館奉行の村垣から岡田一人に対して直接命令を与えられて業務を遂行することもある。右の『新札幌市史』の記述だけでなく、前掲③④の文献でも、それを確認している。すべて安政四年のことになるが、前田氏の推定によれば、この時の岡田は満二〇歳である。村垣は文化一〇年（一八一三年）九月二三日の生まれであると分かっているから、安政四年（一八五七年）では満四四歳程である。

この時の長谷川儀三郎は、前述の通り、数え四八歳程であつた。村垣奉行より、やや年上となるが、大きな年齢差はないので、この二人が「相当に親し

い間柄であつたようである」（『新札幌市史・第一巻』五七一頁）と評されることも頷ける。

これに対して、岡田錠次郎は前田氏の推定では二〇歳程度に過ぎないから、そのような若者が長谷川と並んで奉行に應對したり、時には単独で奉行から命を受けたりしていたというのは不自然である。

また、前掲②の文献から、当時のスツツでは錠次郎はナンバー2の役人であつたが、更にその下に五人が控えていた。もし錠次郎が二〇歳程であつたとしたら、錠次郎より下の部下は更に年齢が若くないと釣り合いがとれない。上官が年若であることは決してあり得ない話とは思われないが、蝦夷の未開拓地を担当する彼等の任務を考えると、通常ではない年齢の上下関係では組織として統率がとれないはずである。

4、松浦の日誌から分かる別の事項

【1】前述の通り、松浦武四郎はスツツで長谷川儀三郎と岡田錠次郎に面談し、アイヌの願いを二人に

伝えたが、それは安政四年八月九日のことであつた。松浦は文政元年（一八一八年）生まれというから、安政四年（一八五七年）当時では単純計算で四九歳程である。

また、これも前述の通り、この時の長谷川儀三郎は数え四八歳程で、両者は年齢的に釣り合いがとれるので面談時も話が合ったと想像できる。しかし、そこには二〇歳の岡田（前田氏による推定年齢）も同席したことになるので、長谷川が余りにも若い直属の部下を引き連れていたことについて、松浦は驚いたはずである。しかし『後方羊蹄日誌』には、岡田が若すぎるというような記録は一言も記されていない。

これに対して、小栗の判定では、この時の岡田は数えで三八歳であり、相応の年齢であるから松浦が驚くはずはない。だから何も記載が無いことの方が自然である。前田氏の判定だと、この時の岡田は二〇歳になるので、それならば松浦は驚くに違いないと想像できるが、前田氏の判定が間違っているとするれば、松浦が何も記録に残さなかったのは当然と

いうことになる。つまり松浦の日誌は、前田氏の判定が誤っていて、小栗の判定が正しいことを傍証していることになる。

【2】また、松浦の日誌には岡田錠次郎の漢詩も紹介されている。丸山氏の本から紹介する。

雪岳氷山銀世界 白雲深處別天開

一 茅□生涯足 疑是夷翁即地仙

（雪の山や氷の山の銀世界、遠く白雲の中をわけて歩いて新しい土地を開こうとしている貴方は、そんな仕事をする一役人で満足しているらしいが、このまゝだとやがて貴方はこのえぞの地で老人となり、えぞの仙人になってしまうかもしれない——の意味であろう）

この詩がいつ書かれたものであるのかは明記されていないが、松浦がこれを見たのは、岩内の酋長セゼンケイの漁小屋であり、その小屋の壁に墨書されていたという。その漁小屋に松浦が宿泊したのは安政四年八月三日である。同じ漁小屋を松浦は一年前の夏にも訪れており、今回で二回目となるが、一年前にいた番人が亡くなっていて、小屋は荒れていた

という。二回目となる今回の宿泊時に見た時、岡田の詩と、その横に松浦自身が書いた詩が「消えかけているが、どうにか読める」程度に残っていた、と記されている。

従って、松浦が岡田の詩を見て、自身の詩を書き足したのは、一年前（安政三年）の夏にここを訪れた時ということになる。その時すでに岡田の詩は書かれていたのだから、岡田がそれを書いたのは安政三年夏に松浦が訪れるよりも前ということになる。

ちなみに、岡田の詩に添え書きするようにして書かれた松浦の詩も記されているので、丸山氏の本から紹介しておく。

猿攀（攀が正しい：小栗注）蟹歩十余年 霜苦雪

辛千島天

健脚自期僧小角 任他人喚做蝦仙

（前の詩に答えて、十余年もの間各地の山々で雪や氷に悩まされながら歩き廻っている私だが、脚については役の小角（小栗注：えんのおづの、役行者のこと）ほどだと自負している。人が私のことをアイヌの仙人などと云っても私は気にし

ないだろう——私は山を歩くことが好きなのだから……という意味であろうか）⁽¹³⁾

このように壁に書かれた漢詩を通して、岡田と松浦は非対面の交流をしていたことになる。それは安政三年の夏のことである。

表2から分かるように、岡田は安政三年三月にスツツ詰を命じられているから、この詩を書いたのは三月より前であるはずはない。三月にスツツ行きを命じられて、同じ年の夏までに、岡田は岩内のこの小屋を訪れたことになる。岩内は寿都から同じ海岸線を北上すれば到着する場所にあり、距離にして四〇キロメートル程であるから、少し離れてはいるものの小樽ほど遠方ではない。従ってスツツ赴任直後に岡田がそこを訪れていたとしても不思議ではない。その時の岡田の年齢は、前田氏の判定では満一九歳、小栗の判定では数え三七歳となる。

右に紹介した漢詩は三七歳の人間が書いたとすれば何も違和感はないが、一九歳の若者が書いたとしたらどうであろうか。もちろん一九歳が、このよう

な詩を書くことは絶対にあり得ないとは断言できない。しかし、自分の子どものような若輩者が書いたその詩を見て、松浦が返歌のように自身の詩を添え書きするであろうか。もちろん最初にその詩を見た時には岡田とは面識は無かったかもしれないので、若者が書いたとは知らなかった可能性はある。しかし、翌年には岡田と松浦は対面しており、その時、岡田は二〇歳程度の若者であることに気付いたはずである。だとすれば、自分が詩を添え書きした相手は、こんなにも若かったのかと驚きの念を持って、あの詩のことを振り返ったはずである。しかし、そのような感想を松浦は一言も記していない。

それが意味することは何かと言え、岡田は、前田氏が判定したような年齢ではなかった、ということである。この事実も小栗が判定した年齢の方が正しいことを傍証していると言える。

5、まとめ

以上、本稿で追加した傍証材料から考えても、前

田氏が推定した岡田の年齢は、岡田錠次郎について考える場合には不適切であると言える。

もともと、若輩者であっても絶対にナンバー2になれないとは言えないかもしれないし、奉行と相對することも絶対には言えないかもしれない。実際、岡田錠次郎のケースにおいて右のようなことは絶対にないとは断定できる証拠はない。それゆえ、小栗の想定は傍証にならないと否定する向きもあるかもしれない。しかし、仮にそのように否定されたとしても、小栗が推定した錠次郎の年齢の根拠は、『事典』及び明細短冊にある「子年四十五」という記録に基づいているので、その推定が正しいことは揺るがない。

なお、岡田清直の年齢は前田氏が推定した通り、明治元年に満三一歳で良いと小栗も判断する。これに対して岡田錠次郎は、小栗の判定では明治元年では数えて四九歳である。このように清直と錠次郎は年齢が大きく異なるので、二人は別人と考えるべきなのである。（静岡理科大学情報学部教授、

二〇二四年一〇月一五日脱稿）

- (1) 拙稿「『駿遠へ移住した徳川家臣団』における岡田清直・岡田錠次郎の謎(その8・完)」(『静岡理工科大学紀要』第三三巻、所収)のこと。以下、本稿で「別稿」と言う時は全てこれを指す。小栗が岡田錠次郎の年齢を判定した根拠も右論文を参照されたい。但し、右論文を収録する紀要第三三巻の刊行は二〇二五年秋頃の予定で、本稿の発行(二〇二五年三月)よりも遅くなることを御容赦頂きたい。
- (2) 熊井保・編『改訂新版 江戸幕臣人名事典 全一卷』(一九九七年二月一日、新人物往来社)
- (3) 『旧幕臣(合本六)』(昭和四十六年七月一日、原書房)。小栗はこれを沼津市立図書館で見ている。
- (4) この役職者一覧表(安政四年)の全体は、杉谷昭『幕末維新史料拾遺』(平成三年一月一〇日、第一法規出版(株))九六頁以下にも掲載されており、一〇三頁に岡田他の記載がある。内容は本稿で紹介したものと同じである。
- (5) 北方資料デジタルライブラリーのHPから北海道立図書館を選び、長谷川儀三郎の名で検索すると唯一ヒットする「薄書5716-21:長谷川儀三郎、採用ノ件(明557)」がそれに当たる。
- (6) 『札幌区史』(明治四十四年七月一日、札幌区役

- 崩し字の木版印刷のため現代人には読み難い。これを現代日本語に翻訳したものが丸山氏の著作である。本稿での引用紹介は丸山氏の本によった。但し原文は、丸山氏の翻訳とニュアンスが違う点、順序が異なる点等がある。また、原文で正しく「岡田錠次郎」とあるうちの「次」の文字を丸山氏は「二」と誤記している。本稿で紹介した岡田錠次郎が登場する部分は国会図書館デジタルコレクションの画像では二八コマ目に該当する。以下、その部分の原文を紹介しておく(ルビは原文のまま。漢字は新字体に直した)。
- 九日抵^{ヘッ}寿都、訪長谷川、儀三郎岡田錠次郎二氏、
(小栗注:儀三郎と錠次郎の文字は分かち書き)、
二氏遇土人尤厚、余亦与米酒煙草漆器故服、以酬其勞矣、磯谷即知別之下流也、自古禁張綱設梁、益岩内^{イサノ}蛇田^{ヘビノ}宇須^{ウス}三落之民、在上流而漁故也、近歲禁弛放漁、故三落皆愁之、余所雇四名、即上流之民、懇^{マコト}訴之、余乃告之二氏、二氏申旧令干下流之民、令無敢犯禁、四名感謝而去
- (10) 日本歴史学会編『明治維新人名辞典』(昭和五十六年九月一〇日初版第一刷、昭和五十七年六月二〇日初版第二刷、吉川弘文館)九七九頁。なお、小林裕

所)は、札幌市中央図書館のHPから中央図書館所蔵デジタルライブラリーを開き、「札幌区史」を検索すると画像で中身を読むことができる。

- (7) 安政三年三月にスツツ詰を命じられたあと、そこへ引越した時期が史料の虫食いのため日にちしか記されていないが、同じ三月中であったのではないかと小栗は想像する。但し正確な情報ではないので表2では「？」を付しておいた。

- (8) 札幌市教育委員会編『新札幌市史 第一巻 通史一』(平成元年三月二十八日、札幌市)は、札幌市中央図書館のHP左のバナー一覧から「新札幌市史デジタルアーカイブ」を選択するとWEB上で全巻を閲覧できる。閲覧はテキスト文と画像の二種類の形で可能となっている。

- (9) 丸山道子・編訳『松浦武四郎著 後方羊蹄日誌』(一九七三年五月一日、凍土社、小栗個人蔵)四四・四五頁。なお、松浦武四郎『後方羊蹄日誌』の原物は国立国会図書館デジタルコレクション(安政六年刊のもの)、札幌市中央図書館デジタルライブラリー(文久元年刊)、早稲田大学図書館古典籍総合データベース(文久元年刊)等よりWEB上で画像として閲覧することができるが、活字ではなく

幸『箱館をめぐる人物史』(二〇〇二年九月一〇日、函館大学出版会)にも村垣を紹介するまとまった文章があるが、そこでは文化一〇年(一八一三年)という生年のみしか記されておらず、村垣と長谷川・岡田が面談したエピソードも記されていない。

(11) 前掲・丸山道子『後方羊蹄日誌』四頁。但し松浦が生まれた月日はそこには記されていないので、本稿では四九歳程と記すことにした。

- (12) 前掲・丸山道子『後方羊蹄日誌』四二頁。丸括弧の訳文も丸山氏による。なお、■は手へんに象の字、□は竹かんむりの下に施の字を丸山氏は記しているが、ワープロでは表示できない漢字なので、ここでは■と□を用いた。但し原文は、■の所は「掾」(但し、つくりの右上部分は「ヨ」で略字表記)となっていて丸山氏は誤記している。「掾」はエン、じょう等と読み、したやく、たすける、の意味があるので「一役人」とした丸山氏の訳は間違っていないようである。また、□の所は原文では、竹かんむりに施ではなく、施の文字の「方」以外の右部分が「色」になっている。原文の文字も丸山氏が用いた文字も、辞書等をいくら調べても小栗には意味不明のままであったが、丸山氏が誤記していることだけ

は確実である。

(13) 同右、同頁。丸括弧内の文章も丸山氏のもので、意味はこの通りで良いと思う。但し冒頭から二文字目、丸山氏が「攀」(瘰癧^{けいれん}の攀)と記した箇所は原文では「攀」(攀^よじ登るの攀)である。明らかに丸山氏の誤記である。